

「鯨っ子学習」第4学年実践記録

報告者 松下 大介

I 本実践の目的

本校の第4学年では、個人研究（以下、鯨っ子学習）に取り組む時期を9月から11月に設定している。本実践では、研究の概要である【A】「アカデミック・ライティングについて学ぶ段階」と【B】「アカデミック・ライティングの技術を用いて書く段階」のそれぞれについて実践を行った。実践例として全体で行ってきたことと意図的に抽出した児童の課題への取り組み方や意識の変容について示す。

上記を実践し、示していく手立てとしてラーニングマップを活用する。そして、その活用や課題解決の各過程における全体や抽出児童の様相について具体例を示しながら述べることとする。

以上、本実践を通して、本学年では各教科等の資質・能力を活用しながら自身の興味関心のあるテーマに沿って見いだした課題について、情報を集めたり、整理・分析したりして解決し、教科横断的な力を身に付けることを目指す。

1 単元の目標（児童の姿）

(1) 単元の目標

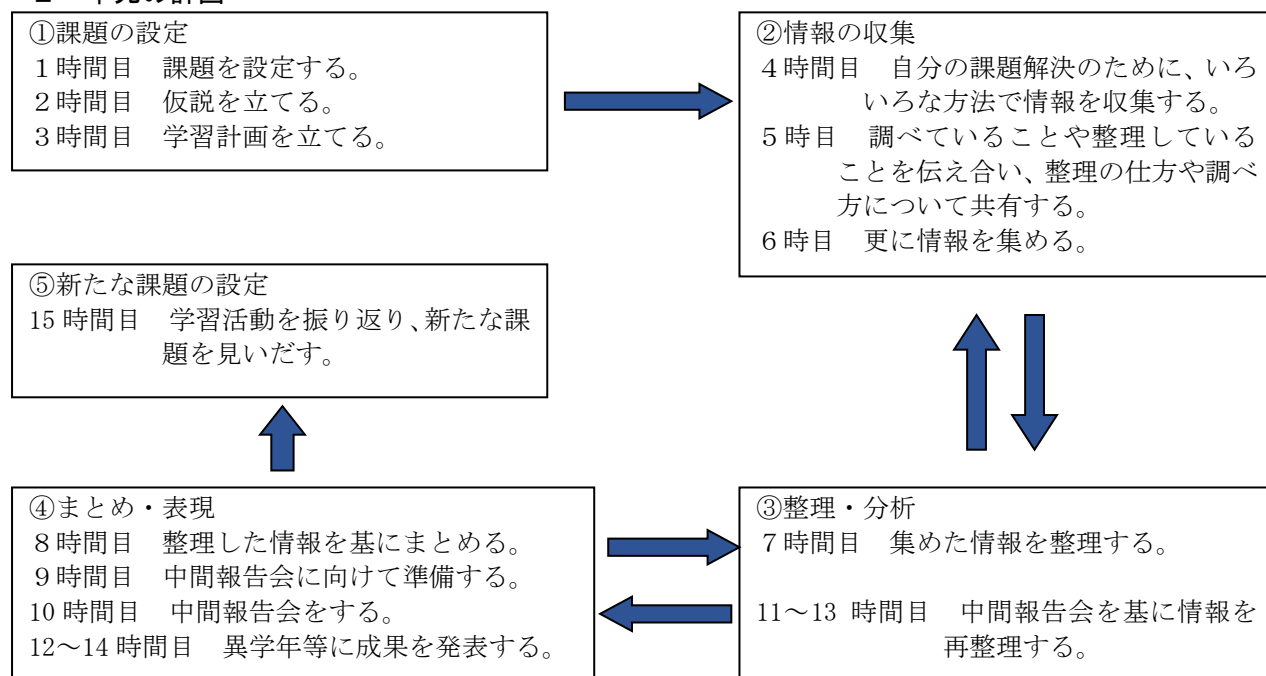
ア 人やもの、事柄の対象に自ら働きかけて理解し、ものごとの道筋やつながりを明らかにすることができる。 【読解力の側面】

イ 相違点を分別することができる。 【創造的思考の側面】

ウ 会話でのコミュニケーションを中心に、他者に思いや考えを伝えることができる。

【他者とのコミュニケーションの側面】

2 単元の計画



3 抽出児のプロフィール

A児	B児	C児
自分で主体的に取り組むことができ、自分で調整しながら活動を進めることができる。	取り組むことが分ければ、どの過程においても、熱心に取り組むことができる。	活動内容が分ければ、することを考えられるが、なかなか行動に移すことができない。

II 「アカデミックライティング」指導における単元の展開と抽出児の様子

今年度、4年生は学年全体を3つのグループ（理科系のグループ、社会科系のグループ、その他のグループ）に分けて鯨っ子学習を進めた。その中で、A児、B児、C児それぞれの活動の様子や口頭質問から3名それぞれの学びの姿について整理し、どのような学びが起こったのかを見ていく。

今回の3名の抽出児については、「花火」をテーマにして、鯨っ子学習に取り組んだ。それぞれの取り組み方や意識の違いを見ることで学びの姿の違いに着目できるのではないかと考えて抽出した。

1 学習課題設定場面における抽出児の様子

課題設定については、夏休み前から意識するように声掛けしたり、夏休みの課題としたりして児童が書き溜めておいた「課題ストックノート」を活用して、テーマを決め、課題を設定するようにした。しかし、実際は、ストックノートを活用することなく課題を設定した児童は約半数（図1）だった。その理由をそれぞれの立場の児童に尋ねた。まず、活用した児童、活用しなかった児童それぞれに表1のように答えている。このことから、テーマを自分で設定する際に持っておくとなかなかテーマや課題が見つからない児童にとっては有効な手立てになると言える。



図1 「課題ストックノート」の活用に係る意識調査結果

表1 「課題ストックノート」の活用についての児童の記述（一例）

<p>〈活用した児童の記述〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全然資料が見つからなくてまとめられなかったときに違う課題にできるから。 ・疑問を忘れずに書いておけるから。 ・課題が決めやすかった。 ・好きなテーマを選んで調べる事が出来た。 ・思いついたことをすぐにかけるから決めるときに便利だった。 ・自分がどうしてだろうと思ったことをすぐ書くことができた。 ・課題ストックノートから、似ているものを引き出して、調べたり整理分析できたりするから。 ・どんなことを調べるか明確になり、どんどん調べる内容が分かってきた。 ・「課題ストックノート」を使うことにより、調べ活動で何を調べればよいのかが分かった。 <p>〈活用しなかった児童の記述〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題ストックノートは書いたのですが、そこから気になることがうまれて、そのまま鯨っ子学習に向かいました。 ・書いていなかった。 ・意識していなかった。使うことを忘れていた。 ・新しく（違う）調べたい疑問が浮かんできたから。 ・課題はもう決まっているからつなげられるのがあまり思いつかなかったから。 ・もうテーマが決まっていたから。
--

	A児	B児	C児
「課題ストックノート」の活用の有無 →理由や利点	「活用した」 →自分の課題につながれるところは、ないか探すため。	「活用した」 →日ごろからいろいろとメモしていたので、役に立った。	「活用した」 →いろいろな疑問を書いて自分が知りたいことを見つけられた。

2 情報の収集・整理及び分析場面における抽出児の様子

情報収集の場面では、タブレット端末を使えることから3年時にはインターネットのみで調べる児童が多かった。そこで、今年度は、3つ以上の方法で情報を集めることを学年共通で確認し、取り組

むようにした。その結果、ほぼ全員が「インターネット」を用いて調べていたが、他の方法でも情報を集めようとしていることが分かった。1人平均約2つ(1.875)の方法で情報を集めており(図2)、約9割の児童自身もいろいろな方法で集めることができたと感じている(図3)。

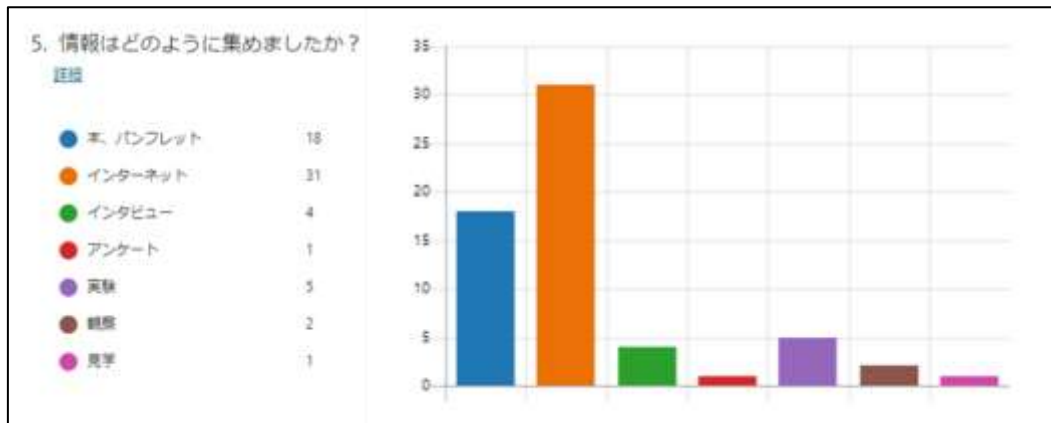


図2 児童が利用した「情報収集」の方法

3名の抽出児童は以下のような方法で情報を集めており、集めた情報を3名ともプレゼンテーションソフトを用いて整理していた。B児とC児は協力して手持ち花火の着火時間や発色について実験及び観察を行った(図4)。



図3 「情報収集」における児童の意識

	A児	B児	C児
用いた情報収集の方法	本やパンフレット、インターネット	本やパンフレット、インターネット、実験・観察	本やパンフレット、インターネット、実験・観察
用いた「思考ツール」	ピラミッドチャート、ベン図、クラゲチャート、マッピング	PMI	(なし)
用いた理由	ピラミッドチャートは(情報を)一つにまとめるために使って、マッピングとかはそのテーマから広げたり分かりやすくしたりするために使った。	友達のものとは比べて取り入れようと思ったから。	(なし)

整理・分析の場面では、どのような整理の仕方をしたか、「思考ツール」を用いたかを視点に児童の様子を見た。約半数は、思考ツールを用いずに、直接スライドに情報を書き出してまとめていた。用いなかったことについて、C児に尋ねたところ「思考ツールをどう使ってよいか分からなかったし、使わない方がまとめやすかった」と答えた。実際に、本やインターネットで調べたことについては、複数の視点から考えたり比較したりしないならば使わずにまとめる方が容易であるだろう。一方、思考ツールを用いて、情報を整理・分析したA児とB児に話を聞くと、「考えを広げたり、2つのものを比べたりする時に分かりやすく表せるから使った」と答えた。先に述べたように、複数の視点から(1つの)情報を見たときに比較したり関係性を考えたりする場合には有効のようである。

3 まとめ・表現場面における抽出児の様子

まとめ・表現の場面では、「3年生に発表する」という明確な目的意識・相手意識の下、「どんなスライドにすれば3年生が分かってくれるか」「どんな内容にすれば3年生は興味をもって聞いてくれるか」「どんな発表にすれば3年生のためになるか」など、個々人がそれぞれに発表の視点をもって取り組むことができた。また、グループ内でも、どのようなまとめ・発表にするのか相互に交流し、友達のよさを取り入れたり、友達からもらったアドバイスを基に修正したりして、発表本番に向けて取り組んだ。更に、各学級でも同様の交流会を行い、違うグループに属していた友達から違う視点で発表を見て、聞いてもらうことで新たに気付くこともあったように感じる。そして、友達だけではなく、家族にも発表を行うことで、自分の頑張りを見てもらうことができると同時に、身近なアドバイザーとして意見をもらうことができたことで、多くの児童が自信をもって3年生への発表本番を迎えることができたようである。



図5 児童の発表の様子

3年生への発表では、どの児童も約4分間、スライドを用いて3年生に伝えていた(図5)。発表後には、質問を受けたり3年生へスライドの作り方や学習の進め方についてアドバイスしたりする姿が多く見られた。発表後には、振り返りを行い、来年度や次時以降の活動について見通しをもっていた。

	A児	B児	C児
自己評価(5件法) →理由	5 →しっかりわかりやすく伝わる声で指をさして説明できたから。	4 →皆の声があった中で、結構いい感じの声の大きさを話せたし、ジェスチャーも使えたから。	3 →うなずいてくれたり「わかりました」「OKです」と言ってくれたから。

(児童の表記のまま)

III 児童の変容

	A児	B児	C児
「鯨っ子学習」を通しての感想	私は、去年から色々な作り方や構造のことを調べて去年よりわかりやすくまとめたり整理、分析をできたのですごいなと思いました。そして3年生が発表を聞いてくれてとても嬉しかったです。	自由に調べていいといわれて、全然テーマが思い浮かばなかったのですが、課題ストックノートを読み返してテーマを作ったので、課題ストックノートが役に立ちました。	最初は集めることができなかったけれど図書室の先生やなどに聞き情報を集められた。

(児童の表記のまま)

III 実践の整理

1 実践の成果

- ・ ラーニングマップを用いたことで、各教科等と鯨っ子学習をつなげて考えることができていた。
- ・ 児童はそれぞれの過程で、自分の課題や発見をすることができ、自己の学びにつながった。
- ・ 「3年生へ伝える」という目的・相手意識をもって粘り強く取り組むことができていた。

2 今後の展望

課題ストックノートやラーニングマップをいかに活用して、より教科横断的な視点で取り組めるか探り、教科横断的な学びの実現の方策を考えていく必要がある。今回先行的にループリック評価や終末の自己評価を実施してきたが、今後は評価の効果的な在り方について探ることも必要である。